



筑紫女学園大学リポジット

博多綱敷天満宮の銅鳥居

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 筑紫女学園大学 人間文化研究所 公開日: 2024-12-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田鍋, 隆男 メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/2000044

博多綱敷天満宮の銅鳥居

田 鍋 隆 男

福岡市の中心部にある劇場博多座（博多区下川端町二）の前の明治通りを東へ進み、三つ目の角を北へ曲がった先に、低層のビルに挟まれてこぢんまりとした綱敷天満宮（同区綱場町）がある。延喜元年（九〇一）に、右大臣・右大将の任にあつた菅原道真（八四五〜九〇三）が、左大臣・左大将の藤原時平の讒言により突然大宰権帥に左遷され、筑紫国大宰府へ流されて来るのであるが、博多袖湊に上陸したとき、休むための敷物がなかつたので漁師たちは舟の綱を巻いて円座にして差し上げたという。そのことに因んで後にこの地に綱敷天満宮が建立され、町名が綱場町になつたといわれる^{〔注1〕}。

綱敷天満宮の入口にある石鳥居の柱には「綱場町」と陰刻され、もう一つの柱には「土居町」とある。現在の地名は綱場町であるが、かつては下土居町になる。この稿の史料『銅花表奉納詳細記抜書』を所蔵している称名寺（時宗、現在は福岡市東区箱崎馬出町に移転）^{〔注2〕}もかつては片土居町にあり、綱敷天満宮と同じ地名であつた。明治の初めに綱敷天満宮に奉納された「銅鳥居」について記した『銅花表奉納詳細記抜書』は^{〔注3〕}、明治六年（一八七三）五月に発起人の安川源右

衛門（博多綱場町年行司格の日田屋源右衛門）によって書かれた記録で、銅鳥居の建設発起から建設費募集活動、出費の明細、制作方法、完成した各部の町内を曳き廻してお披露目、棟上式といった過程と、建造を担当した鋳物師山鹿宜平が記されている、銅鳥居製作過程を知ることができる好史料である。

『銅花表奉納詳細記抜書』^{〔注4〕}

発起人である安川源右衛門によると、そもそも博多冷泉津にある綱敷天満宮に銅鳥居を奉納しようという話は以前からあつたが、容易な事業ではないので時期尚早と思つていたら、いつのまにか数年が過ぎてしまった。そこで明治二年（一八六九）に忽然と建立することを思い立ち、傍友の中西惣右衛門に話して賛同を得、さらにほかの人々の協力も得ようということになつた。二日とたたずに記載名簿が整い、鋳物師も山鹿宜平と決まり、銅鳥居建設の準備が整つてきたので、神様の加護を祈つて着手することになつた。

先ず、銅鳥居の建設費を募集するにあたって、中西惣右衛門とともに寄付依頼のため博多の町内を廻ったところ、皆快く直ぐに御寄進帳に加筆してくれた。そして鑄物師山鹿宜平からは金四二〇兩の十一月十五日付鑄造費見積書をいただいた。

明治二年十一月十七、十八日の両日で、現金で金一一五兩一步の寄付金が集まった(注)。寄進帳に記載された主な寄付者および金額は次の通りである。先ず發起人である安川源右衛門が金一〇〇兩、博多を代表する資産家野村家の五代目当主野村久治が金五五兩、秋月屋卯平と博多屋宗右衛門が金五〇兩宛、井筒屋甚兵衛と博多の紳商のなかでも実業派の領袖である下澤善右衛門、博多を代表する鑄物業の主人磯野七平の三氏が各金三〇兩宛、紳商下澤善治郎と大坂安東寺町の和泉屋茂七、博多実業界の重鎮のひとりである児嶋善三郎、大森嘉平の四氏が各金二〇兩宛という大口がそろい、これに続くのが須恵皿山の澤田舜山組合が一二兩、園田小七、米屋藤助、鳥羽屋市助、米屋喜助、古川嘉平、京都五条坂の近江屋小右衛門の手代多七、奈良屋権吉、肥後屋徳治、長州下関観音崎の油屋与三郎、豊屋作平、小堀甚七の一一氏が各金一〇兩宛、香具屋宗助が金八兩、米屋喜平が金七兩二歩、白土屋久平が金六兩七合二勺、奥村伊八が金五兩五合五勺、内田八右衛門、清水屋嘉平、油屋幸吉、白垣儀助、伊藤千七、人形屋甚三、武蔵屋幸七の七氏が各金五兩宛、梅垣家の丑蔵の娘が四兩、品川弥右衛門が金一兩、そのほか金一步の者もあって金六一五兩二勺の寄付が集まった。

さらに綱場町からは櫛屋茂平、櫛屋金右衛門、櫛屋茂助、山本屋源

六の四氏が世話人となって、木綿屋孫次、櫛屋源治郎、袋屋又吉、姫路屋清兵衛、舂屋久平、櫛屋清次、亀屋卯平、福嶋屋弥七、山本屋源六、長崎屋利八、小松屋利右衛門、多飛屋伊右衛門、綿屋治右衛門、袋屋半治郎、櫛屋儀助、菱屋嘉吉、墨屋卯助、紅屋太助、角屋卯吉、日田屋源右衛門夫人から世話人分もあわせて一六七兩一合八勺の寄付をいただいた。

土居町からは新嶋与平、白水藤七、新嶋善吉の三氏が世話人となって、吉井屋喜平、春田三郎、斧屋貞平、礮貝次平、礮貝茂平、裁物屋善吉、菱屋治助、米屋儀六、扇谷三吉、裁物屋與吉、粉屋新平、大工の平治郎、菱屋正右衛門、粉屋久右衛門、裁物屋与右衛門、鋏形屋善平からあわせて金一〇七兩の寄付をいただいた。

掛町からは小間物屋利作と仲嶋屋清治が世話人となって、仲嶋屋清次、肥後屋次吉、紙屋平助、松居五平、肥後屋治平、米屋茂平、中西惣右衛門、魚屋五三郎からあわせて一一四兩三步の寄付があつて、寄付金の合計は一〇〇三兩九合五勺となった。

次に寄付金を依頼するのに訪問先に持参した酒肴の代金が記されている。十一月十七日、掛町の肥後屋次吉方へ寄付依頼に行ったときに持参した酒肴代は金七四匁五分で、同日に發起人宅へ持って行った酒一升は金一八匁である。同十八日、綱敷天満宮社家梅垣宅にての初寄合のときは廻文が出されたので出席者が多く、その費用は金八二八匁である。綱場町へ寄付を頼みに行った際の酒肴代は金一四九匁九分で、掛町並びに他所の名簿の話し合いに際して、桐部金右衛門方へ持参した酒肴代は金三八匁である。同二十一日、石工の藤右衛門と甚助のと

ころへ行き、日雇いの善平を呼びに遣るなどして、粗々の出費は金八二匁を要した。同二十七日、名簿の控えを持参して梅垣刑部とともに水野様にお願いを申し上げに行つた際に持参した酒肴代は金四五匁であつた。

その結果、思いの外寄付金が集まつたので、予定していた鳥居を少し大きいものにしたと、中西惣右衛門に相談して賛同を得たので、一緒に鋳物師の山鹿宜平のところへ行き見積書の修正をお願いしたところ、翌日に山鹿宜平から一〇〇両増しの金額が出された。これについて色々申し入れたが不承知との事なので、すぐさま取りなしを申し入れた。

明治二年十二月八日、鳥居の設置場所が決まり、天満宮境内の接待引石橋や玉垣の改修等の話し合いがあり、寄付連中への廻文がつくられた。その費用は金三六二匁である。

同十三日、鳥居鋳造が着工され、これまた廻文がつくられ、鋳物師山鹿宜平のところへは酒肴代として金一四四匁八歩を持参した。

同二十四日、鳥居建立に際し願書が、綱場町年行司格の日田屋源右衛門（安川源右衛門）から寺社奉行宛に出された。その「口上之覚」には「私儀、綱敷天満宮へ念願があり、時節柄何分にも自力では及び難いが、信心がある間に銅鳥居を寄進したいと思つてゐるので、何卒願いが成就するよう御許容いただきたい。勿論質素に取り計らいますので何分共よろしくお聞き届け下さいますようお願い申し上げます」というもの。さらに綱敷天満宮社家の梅垣氏からも、同日付で社寺奉行宛に、「綱場町の日田屋源右衛門の義について、年来の心願である当

社への銅鳥居を寄進することの申し入れがあつた。これは境内に建立するもので、宜しくお聞き届けていただきますようお願い申し上げます」というもの。そして同月二十七日付で上土居町の年行司の深見甚三郎から日田屋源右衛門宛に、願いが今日お聞き届けられたという通知があり、祭祀局からも梅垣刑部宛に同内容の通知があつた。そして寄付した連中へは二十八日付の廻文でもって、出願中の銅鳥居奉納ならびに鳥居の柱前面に刻む太文字「天下泰平国家安全」の儀は、昨日お聞き届けられたと発起人日田屋源右衛門から知らされた。なお、右の請願に付き一〇八匁の出費でもって遺物をした。

鳥居雛形の絵図が出来たので大形屋棟平へ製作費として金九〇目（匁）が渡され、十二月二十九日に次の三人へ絵図板が贈られた。一枚は綱場町年寄の柴田茂平、一枚は土居町年寄の新嶋与平、もう一枚は世話人の中西惣右衛門である。この絵図板制作にあつて、年号月日名元の儀は岩崎蕉陰へ依頼し、そのお礼として金一五匁の焼き物を遣わした。また濱三嶺に柱前に刻む字を頼みに行つたときは、金九五匁で練酒一斤と鯛一枚を持参した。さらに正月四日に寄進札を張り出すことを申し出たので、寄進札代に金三三匁を要した。

次に石材について、長さ五間半に差渡し二尺五寸の石橋と基壇部上方の葛石には柏原石四貫一五〇目を使用し、長さ四間に差渡し五尺の石橋で、ただしそのうちの一間は梅垣刑部邸の前に掛るもので、それに姪浜石一貫六七〇目を使用する。さらに玉垣台一間半に一間を据え付けるのに姪浜石八五〇目を使用する。さらにその他の石玉垣、御門、葛石一七匁七分五厘を据え置くのに金四両二歩がかかり、石橋など六

貫六八七匁七分五厘の費用が金六六兩八合七匁七錢五文なので、合計金七一兩三合七匁七錢五文が石工に渡された。

明治三年（一八七〇）庚午正月五日より二月二十五日までの接待引並びに御門引に関する日雇方の賃銭および雑作に、日雇方鋤形屋善平へ金二九兩二合六匁五錢が渡され、大工作業料ならびに諸費用に、接待再興代として大工の利平と甚右衛門へ一七兩六合一匁七錢が渡された。ほかに糶屋藤七へ材木代として金一八兩九匁六錢五厘が払われ、菱屋三郎へは金三兩一合六匁五錢が釘などの金物代として、金一兩三合は兩戸二枚の代金として払われた。左官の正吉へは金一八兩四匁八錢が御門接待および漆喰接待の上塗り上の一切の賃銭として払われ、さらに金一二兩三合九匁が白土、葶（からがし）づさ、ふのり、漆喰用鯨油の代金として渡された。畳屋へは金二兩一合が接待用に敷く畳三枚分が渡された。絵師梅香へは接待戸二枚の画料として金三步二朱が渡された。金一三兩七匁二錢は正月より仕上げてきた酒代と、鋳物師山鹿宜平へ鋳入する毎に遣わす酒肴代一切である。以上めて金一一五兩九合二匁八錢五厘が支出された。

正月十一日に鳥居建設地の地固めの地形搗きに金七七二匁五分を消費したという廻状を寄付連中へ出した。また、同日に鋳入をすることが廻状にて知らされたので、皆出かけることになり、その際の御神酒代として金一八五匁の消費があった。

この頃軍隊の英俊隊の左右五番までが数か寺に滞在することになり、

その御見舞いとして正月十九日に左一番隊より五番隊までに、食物の加免煮（がめに）が差し入れられた。その費用は金一一兩一匁三錢だった。同月二十一日には、左隊に差し入れて右隊にしないのは相済みないということで、同じく加免煮が右隊に差し入れられた。その費用は金一二兩六合五匁一錢である。その御礼として隊長等からお酒四斗樽一丁と鯛（するめ）三枚が贈られて来た。酒は行丁（町）の柏屋酒場に預け置き、必要な時に届けることにした。さらに後日の三月に、御見舞いの寸志に対して、大隊長楨直躬と郡翼成から銅鳥居寄進申あてに、「今年正月の軍隊駐屯の折に寸志を差し出された厚志は奇特の至りである。依って目録（御酒鯛料金八兩）の通り差し遣わす」というものであった。なおこの事は鳥居の棟上のお披露目することにした。

正月二十四日に鋳入するという廻状が出され数人が出掛け、その際に出費した御神酒代は金二二匁。掛町の寄進金を取り立てる寄合があり、掛町世話人へ遣わした酒肴代は六三匁六分である。正月七日に天満宮より蠟燭一斤を取りに来て、そして吉竹屋喜平より目録が来たので三五匁を払った。網場町の寄付金割合に関して寄付連中の会合があり、世話人が受持ちとなった。その費用は金六兩であった。

鳥居の石代と手間賃一切は、石工増田籐右衛門と廣田甚助に払われた。柏原石を使用し、鳥居の基壇上部の葛石は二つで、敷石は横二間半に幅一間の葛石一式で金四〇兩六合六匁七錢である。鳥居の根つき石を二つ追加して金一五兩となり、めて金五五兩六合五匁七錢を渡した。

鑄物師山鹿宜平に渡される銅鳥居鑄造代は金五二〇両である。但し四回に分割払いされ、四月三日に金三〇〇両、五月三日に金一〇〇両、六月廿日に金一〇〇両、十一月十五日に金二〇両が払われている。

山鹿宜平が言うには、鳥居の上部にある笠木は楠材で製作し、その表面に鑄物の銅板を張って仕上げるので、早々に楠材を求めようというのであった。そこで五月三日に楠材平物三〇枚を春吉村の平四郎から代金八両にて購入し、さらに酒代一匁八分が追加された。

鳥居完成が近付いてきたので、六月二十日に餅米を買入れ、搗賃六匁をにかけて白米に精製して用意した。ところが鳥居が成就する間際に事故があり、棟上式は中止された。しかし、それでは世間的に相済まないことなので、白米を保管貯蔵していたところ鼠害にあい、さらに米相場の下落により損害を被り、棟上式をするには改めて買い求めないといけないことになった。今ある白米を売り払うとしたら、一貫三七二匁五分であるが、この数字は根拠が薄いので委細は別紙に記録している^(注6)。

竣成した鳥居の各部分を町内にお披露目のため台車に載せて引廻しをするとき、台車の前後には高価な飾り付けを四か所施し、また寄付連中へはぶらり提灯を遣わすことにして、菱屋嘉吉に頼んで賃金三六匁を渡した。

五月十一日に発起人日田屋源右衛門から寄進連中へ廻状が差し出された。「口上、皆様御寄進の銅鳥居が成就しましたので、来る十四日朝五つ時に金屋丁の山鹿宜平方へ受取に参集するよう、この廻状を以て懸けつけてくださいますよう申し上げます。なお子供たちも連れて来

てください」とある。この賃銭として福次郎へ二〇目が渡された。また鳥居引廻しときは絵図を判摺りにして、寄進連中へ一枚ずつ配布し、さらに紅花手拭を遣わすとのことで、それは土居綱場両町の世話人ならびに若衆中、掛町世話人、鑄物師や石工一手中、木遣り言いの五人である。ほかに諸々よりの加勢人には黄手拭が渡された。二日間の鳥居引廻しにかかる費用は金四〇両八合七勺三錢五厘である。

六月二十三日、笠木を受け取りに行ったところ、西門と中小路の両丁(町)より加勢が来て、笠木を鳥居の上に揚げる事ができた。その際の費用は金八五四匁であった。額束の場合は金二一両三合三勺一錢の費用を要した。神具師の大杉屋棟平へは金五両二歩が渡され、棟上式のときは多くの料理が出され、来た加勢連中への酒肴代は金五四匁を要した。

明治四年(一八七二)辛未九月二十一日に棟上式が挙行された。その際の御供物、包物、米三俵、酒肴などの費用は金一一両五合九勺三錢で、この一切は梅垣が負った。さらに弓矢の飾物、包物、米四俵、酒肴の一式、金一八両一合二勺は山鹿宜平がもち、米三俵、包物、酒肴代の金七兩二勺は佐藤卯助がもち、米二俵、包物、酒肴の費用金五兩四勺五錢は宇助がもち、米三俵、包物、酒肴代の金八兩二合四勺四錢は石工の増田籐右衛門と廣田甚助がもち、米三俵、包物、酒肴、賃銭一切の金四兩五合四勺七錢は日雇方の善平が負った。さらに両丁の年寄、助役、世話人へ遣わす幣台に金一兩六合五勺を要したが、酒肴と幣台の費用金一兩一合七勺は中西惣右衛門がもち、幣台と肴の費用

金三合六勺七銭は発起人が負った。これに棟上式の料理などの費用、
て金七一兩八合三勺七銭が加算されて、総計金一二九兩五合二勺五銭
となった。

ただしこの内、金八両は棟上の際に大隊長より頂いた分で、これに
米一俵分の金一兩八合五勺は下澤善治郎より、金一兩四合七勺は野村
久次より、米半俵分の金九合は下澤善右衛門より、金七合七勺は綱場
町の寄付をしていない人より、金一合五勺は八百屋惣右衛門より、米
一俵分の金一兩八合五勺は井筒屋甚兵衛より、金三合は米屋藤助と畳
屋作平、奈良屋権吉より、金二合は橋口町の梅垣と奴留由より、金一
合五勺は大山次平と田中傳治より、金一合は米屋儀六と青木よりのメ
て金八兩五合九勺となるので、大隊長からの分を合わせての合計金一
六兩五合九勺を引いた残りの金一二兩九合三勺五銭が棟上式の費用
となる。

総費用は金一〇四一兩七合六勺五銭で、その内の金一〇〇三兩九合
五勺は寄付金の寄高である。従って差し引きの残金三七兩八合一勺五
銭が不足となるが、この分は発起人が補填している。

以上が銅鳥居奉獻の発起から棟上までの記録である。私が認めて手
元に所持しているが、格別の大金を御寄進していただいた方には書き
抜いた一冊を差し上げている。明治六年（一八七三）五月付の、発起
人安川源右衛門が土居町年寄の新嶋與平あてに記したもので、外に配
信したのは野村久次、守部卯平、山崎宗右衛門、樋口甚兵衛、下澤善
右衛門、磯野七平、村上清次、綱場町年寄柴田茂平、世話人中西惣右
衛門の方々である。

銅鳥居について

今日よく見る鳥居は木造とか石造、鉄筋コンクリート製などがある
が、近世および昭和期戦前までは朽損しやすい木造に替わるものとし
て青銅製鳥居（銅鳥居）があった。この稿では名称を史料名にあわせ
て「銅鳥居」としているが、これを「かねのとりい」と呼ぶ神社が多
い^{（注3）}。構造としては大きく二つある。一つは青銅の鑄造で造られた
ものと、もう一つは木製鳥居に銅板を被せたもの、あるいは鉄骨構造
に銅板を被せたものである。後者の場合は「銅装鳥居」と呼ばれてい
る。この綱敷天満宮の場合は史料五〇頁に「鳥居笠木之義ハ楠ヲ以其
上ヲ鑄物ニ而張不申テ者出来不致候」とあるので、鳥居上部に横たわ
る笠木だけは構造上軽量にするためか内部に楠材を用いて、その表面
に銅板を被せた部分的な「銅装鳥居」にしている。また史料五二頁に
「鳥居引廻り」があることから、町内を出来上がった平らな銅板をお披
露目するとは考え難いので、笠木以外の柱、貫、額束といった部分は
鑄造され、出来上がったその各部のお披露目の町内引廻しがおこなわ
れたと思われる。ほかの例として、明治四一年（一九〇八）に土居町
の深見鉄工場で作られた光雲神社銅鳥居の場合は、柱、笠木、貫と
いった各部（総重量六二〇〇斤、三七二〇^{（注4）}）を、職工、神官、有志
者、そして綺麗に着飾った妙齡の令嬢二〇〇人と長寿の高砂連六〇〇
人によって引廻しがおこなわれ、町内を練り歩いて西公園の光雲神社
まで運ばれている^{（注5）}。また「銅装鳥居」の例としては、大正一〇年
（一九二一）三月に完成した、東京都千代田区九段の靖国神社の大村益

次郎銅像の手前にあった銅鳥居の場合は、陸軍省が靖国神社遷座五〇年記念として同社に偉観を添えるために、全国から約二〇万円の義援金を集め小石川砲兵工廠で製作されたもので、鉄骨七〇噸を使って外形を造り、これに一五六〇貫（五八五〇〇キロ）の青銅板を貼り付けた、高さ六九尺四寸、笠木の長さ九八尺六寸、柱の直径六尺四寸の大銅鳥居であった（注9）。

福岡県内にあった主な銅鳥居

①英彦山神社の銅鳥居（田川郡添田町大字英彦山）

寛永十四年（一六三七）に肥前藩主鍋島勝茂が寄進したもので、明治三十三年に靈元法王から下賜された「英彦山」の額東が朽損していたので佐賀県民から義捐金を集め、佐賀市内の谷口鉄工所によって修繕がされている（注10）。昭和十四年に文部省内で開催された同年度最初の国宝保存会総会で国宝（特別保護建造物）指定にあげられている（注11）。

②太宰府天満宮の銅鳥居（太宰府市宰府四丁目七一）

西鉄太宰府駅前にあった一の鳥居で、天明元年（一七八一）に建造された。絵葉書が多く出回っているが、明治三十三年（一九〇〇）の東宮（後の大正天皇）の太宰府天満宮御参詣記念として献上された写真集の中に、博多古門戸町の写真師三苦利三郎が沐浴齋戒して撮影したこの銅鳥居写真があることが知られる（注12）。記録に「神門一字 但大町口ノ銅鳥居也ノ奉造立神門一基ノ天明元年辛丑十二月朔日ノ肥前国唐津ノ願主ノ常安九右衛門保道」とある（注13）。

③宗像大社の銅鳥居（宗像市田島二三三一）

宗像郡出身の凱旋軍人一同が三〇〇〇余円を拠出して、記念として官幣大社宗像神社に奉納したもの。博多片土居町の磯野鉄工場に铸造が依託され、明治四十年（一九〇七）旧九月一日の例祭当日に除幕式がおこなわれた（注14）。

④光雲神社の銅鳥居（福岡市中央区西公園一三一）

明治四十一年に遠賀郡水巻村三好炭坑の坑主三好徳松が、前年の香椎宮に奉納した石造大鳥居に次いで、西公園に遷座する光雲神社に奉納したもの。博多の深見鉄工場で製作され（注15）、明治四十一年四月十五日に竣工した。銅鳥居の柱、笠木、貫などの部品総重量六二〇〇斤は、鳥居柱二本と深見鑄工場の職工を先頭に神官、額東と職工、楽隊、有志連と綺麗に着飾った妙齡の令嬢たちの都保美（つぼみ）会員二〇〇人の振袖行列、笠木と御長寿六〇〇人の高砂連という順番にて曳かれて町中を練り歩くことになり、工場近くの櫛田神社に集合して下祇園町から川端筋を下って中島町、福岡橋口町を経て大横町に折れ公園本道を通って光雲神社まで運ばれた（注16）。

⑤高良神社の銅鳥居（久留米市御井町一番地）

大正時代に三潞郡鳥飼村の森友作と北嶋幸太郎、佐賀県杵島郡武雄郵便局長二位景暢ほか五名は、三井郡国幣大社高良神社の御手洗橋詰に唐銅製大華表を寄付しようと、筑後および肥前の講社において金四〇〇〇円の寄付金募集方を、久留米署を経て谷口留五郎知事に出願した（注17）。「鳥居の研究」に高良神社の三之鳥居が「銅板で包んである」と書いてあるので「銅装鳥居」である（注18）。

⑥ 櫛田神社の銅鳥居（福岡市博多区上川端町一―四一）

大正六年（一九一七）三月十二日、同神社拜殿にて献納者太田清蔵夫妻はじめ氏子総代一同による銅製大華表献納奉告祭が執行された^{〔注19〕}。総工費一〇〇〇〇円にて大正七年から鑄造に着手し、大正九年十二月二十七日に竣成。引き続き本磨きや手すり等の付属工事を終えて、新年早々に落成式がおこなわれた^{〔注20〕}。

⑦ 三柱神社の銅鳥居（柳川市三橋町高畑三三三―一）

柳川藩主ゆかりの三柱神社の当初の銅鳥居は、文政五年（一八二二）に小野和泉が寄進したもので、「銅皮の鳥居」と呼ばれ表面に銅板を張り付けた「銅装鳥居」であった^{〔注21〕}。その後破損が目立ち昭和五年の大風で倒壊し、翌年に再建する銅鳥居は鑄造による新造と決定して福岡の深見鉄工場が製作した^{〔注22〕}。昭和六年八月二十五日に三柱神社秋季祭礼のときに竣工式が挙行された。大鳥居の高さ三丈、西側の円柱は一本重量二三〇〇斤に達し、笠木の重量四〇〇〇斤、その長さ三八尺五寸で正面左右および中央の三ヶ所に立花家の定紋祇園守三個が嵌め込まれた。総工費八〇〇〇余円であった^{〔注23〕}。

⑧ 多賀神社の銅鳥居（直方市直方七〇―一）

明治二十四年（一八九一）五月四日付『福陵新報』に、多賀神社社務所から、先年銅鳥居建設のための寄付金を募集したところ、不都合があり当分は寄付募集はおこなわないとの広告が掲載された^{〔注24〕}。その後銅鳥居建設がおこなわれたという報道はないが、昭和十八年六月十日付『西日本新聞』の「銅製鳥居も応召」の記事のなかに多賀神社の名が列挙されていることから、制作年は不明だが銅鳥居は建立さ

れていた。

⑨ 宮地獄神社の銅鳥居（福津市宮司元町七―一）

昭和十八年六月十日付『西日本新聞』の「銅製鳥居も応召」の記事に国策の金属供出に献納されることになった福岡県下の銅鳥居一〇例のなかに挙げられている^{〔注25〕}。

⑩ 水田天満宮の銅鳥居（筑後市水田六二―一）

同じく国策の金属供出に献納されることになった福岡県下の銅鳥居一〇例のなかに挙げられている^{〔注26〕}。

銅は鉄とともに軍需金属として戦前から重要視されていたが、いよいよ戦局が厳しくなると昭和十八年三月の定例閣議で岸信介商務大臣が説明した「金属類非常回収第一回実施要項」が決定され、同夕に情報局より「金属非常回収実施要項」が発表された^{〔注27〕}。九州帝国大学法文学部教授の干潟龍祥氏^{〔注28〕}は県内の銅鳥居の鑑定を依頼され、英彦山神社の銅鳥居は歴史的に貴重な国宝であると除外存置することにしたが、これ以外の神社の銅鳥居は戦時金属回収されることになった^{〔注29〕}。

ただし、昭和十八年六月十日付『西日本新聞』の「銅製鳥居も応召」の記事中に、綱敷天満宮の銅鳥居は記載されていないが、綱敷天満宮の銅鳥居は現存していない。

鑄物師山鹿宜平について

近世半ばの博多の鑄物業者の数は、明和二年（一七六五）に著され

た『石城志』巻之七^{注20}に金屋町一軒、土居町三軒、大乘寺前町三軒そして釜屋番に一軒の計八軒と記されている。その中で敷島天満宮があった土居町の三軒のうち二軒は磯野と深見両家の二大鋳物業家である。茶の湯で使用する芦屋釜の生産地で全国にその名を知られた遠賀郡芦屋町山鹿をその出自とする山鹿(旧姓太田)家は、天正頃(一五七三〜九二)に博多に移住して来ている^{注21}。この史料にある完成した銅鳥居を御披露目するために町内引廻しをする廻状に、「金屋丁山鹿宜平方へ受取ニ参可申候」とあることから、金屋町の一軒は山鹿家ということが分かる。明治二十八年に日清戦争凱旋記念の兵装銅像を制作した山鹿平十郎包永は福岡上名島町に在住している^{注22}ことから、山鹿家は明治期半ばには福岡上名島町に移転している。さらに大正十一年の長政公三百祭のときに西公園光雲神社に奉納された青銅製水槽を制作したのは山鹿銅器鋳造所という会社で^{注23}、この時には近代的な会社名になっている。

おわりに

慶応四年(一八六八)正月の戊辰戦争に始まる幕末の混乱期に、新政府は四月には太政官制の新体制をつくり九月に明治と改元。福岡藩は贖札事件で真つ先に廃藩となり、世情騒然と移り変わるなか、神のご加護を祈るように博多の中心部で綱敷天満宮の銅鳥居建設がおこなわれた。先ず明治二年十一月から寄付金集めが始まり、十二月に神社奉行の建設許可を得。同月十三日に金屋町の山鹿宜平の工場で「鑄入」

が着工された。明治三年五月に「成就」し、お披露目の町内「引廻し」がおこなわれ、明治四年九月に総計一〇四一両七合六勺五銭の費用がかかった銅鳥居の棟上式が執行された。そして明治六年五月に銅鳥居建設記録の抜書が、発起人安川源右衛門から土居町年寄新嶋與平にあてた形式でつくられた。それから約四半世紀後の明治三十一年八月におこなわれた博多綱敷天満宮の夏祭りは、綱場町では例年通り意匠を凝らした見立細工が飾られて非常な賑わいであることが報じられ^{注24}、明治三十五年の菅公一千年祭のときには下土居町と綱場町から共同で絹本墨画「綱敷天満宮御肖像」が奉納されている。

この稿を書くにあたって称名寺住職河野隆光様、福岡市教育委員会文化財保護課、柳川古文书館学芸員白石直樹氏、公益財団法人古都大宰府保存協会のご協力を得た。ここに記して感謝申し上げます。

注

- 注1 貝原益軒編著『筑前国続風土記』元禄十六年(一七〇三)完成(翻刻伊東尾四郎校訂『筑前国続風土記』巻之四 博多 文研出版 二〇〇一年)。「筑前国続風土記」には「綱輪天神」と記されている。『角川日本地名大辞典 40 福岡県』(角川書店 一九八八年)では、綱場の「綱」は宋では船団を意味するので対外交流の窓口らしい地名と紹介している。
- 注2 称名寺は明治四五年(一九一二)に建立された博多大仏(像高三八尺、一一・五m)がある寺として知られていた。博多大仏は住職河野智眼師と鋳物業者磯野七平親保によって、地元の仏師高田又四郎が図面を描いて原型を制作し、鋳物師山鹿平十郎包輝が鋳造した。ただし称名寺は市街地整備計画により大正一〇年(一九二一)に現在地の東区箱崎馬

出町に大仏とともに移転し、博多大仏は昭和十九年に戦時金属供出されて消失している。

注3 福岡市内寺社資料調査報告書四『時宗称名寺資料・時宗光福寺資料・

時宗寿宝寺資料』称名寺古文書692 福岡市教育委員会 二〇一三年。

注4 鳥居は神社の神域の出入り口に建設されるもので、表記としては「鳥居」が一般的であるが、ほかに「花表」（「華表」）とも表記することがある。これは鳥居の起源を中国の華（花）表に求めようとした誤解に基づくといわれる（稲垣栄三「鳥居」『国史大辞典 第一〇巻』吉川弘文館 一九八八年）。今回の史料題箋には「花表」と記されているが、この稿では一般的な「鳥居」と表記し、名称は史料名にあわせて「銅鳥居」とする。

注5 わが国の貨幣制度の基本単位「円」が制定されたのは、明治四年（一八七二）五月十日公布の「新貨条令」による。これ以前に通用していた一両は一円となった。ちなみに明治二年の東京における玄米一石（一五〇キログラム）の米価は九円二銭、平成十八年（二〇〇六）の東京における国産コシヒカリ（一〇キログラム）の小売平均価格は二七一八円である（森永卓郎監修『明治・大正・昭和・平成 物価の文化史事典』展望社 二〇〇八年）。

注6 別紙は不明。

注7 最古の銅鳥居は昌泰元年（八九八）に東大寺大仏鑄造の際に余った銅で醍醐天皇がつくったという吉野山の「かねの鳥居」といわれる。現存最古の有名な銅鳥居は日光東照宮にある寛永十三年（一六三六）に三代将軍徳川家光が奉納したという「二の鳥居」（重要文化財）で「唐銅鳥居（からかねのとりい）」と呼ばれる（根岸榮隆『鳥居の研究』三一―頁 厚生閣 一九四三年）。

注8 『福岡日日新聞』明治四十一年四月十五日五面。

注9 『福岡日日新聞』大正九年八月二三日四面、同十年一月一六日七面。

注10 『福岡日日新聞』明治三十三年五月一日三面。

注11 『福岡日日新聞』昭和十四年七月五日七面。

注12 『福岡日日新聞』明治三十三年十月二十四日一面。

注13 『大宰府詣記』嘉永五年（一八五二）。

注14 『福岡日日新聞』明治四十年八月一日五面。

注15 『福岡日日新聞』明治四十年十一月一日五面。

注16 『福岡日日新聞』明治四十一年四月十五日五面。

注17 『福岡日日新聞』大正六年九月十六日七面。

注18 『鳥居の研究』一七七頁。

注19 『福岡日日新聞』大正六年三月十三日七面。

注20 『福岡日日新聞』大正九年十二月二十八日五面。

注21 『柳河新報』明治四十五年六月十五日二面。

注22 『柳河新報』昭和六年五月三十日三面。

注23 『柳河新報』昭和六年九月十二日三面。

注24 『福陵新報』明治二十四年五月三日四面。

注25 『西日本新聞』昭和十八年六月十日四面。

注26 『西日本新聞』昭和十八年六月十日四面。

注27 『西日本新聞』昭和十八年三月十日四面。

注28 千濁龍祥（ひがたりゅうしょう、一八九二―一九九一）

福井県出身、九州大学名誉教授、福岡女子大学学長、一九六五年から筑紫女学園短期大学顧問兼教授、日本学士院会員、勲二等瑞宝章、西日本文化章、著書『本生経類の思想史的研究』『ジャータカ概観』他多数（『福岡県人名録』西日本新聞社 一九八八年）。筑紫女学園大学構内バ

ス停前の緑地内に「干潟龍祥先生之像」がある。

注29 『西日本新聞』昭和十八年六月十日四面。

注30 津田元順校訂・津田元貫編録『石城志』明和二年（一七六五）完成

（翻刻）檜垣元吉監修 九州公論社 一九七七年）。

注31 加藤一純編著『治工山鹿氏系譜序』天明三年（一七八三）成立（『福岡県史 通史編福岡藩文化（下）』五六六頁 福岡県 一九九四年）。

注32 明治二十八年（一八九五）七月、日清戦争から凱旋した福岡歩兵第二

十四聯隊兵士で福岡上名島町出身の兵士と、第六師団の応召にて佐世保

軍港の守衛を勤めて帰郷した同町出身の兵士と、二人の凱旋記念として上

名島町から依頼されて兵装銅像を同町の山鹿平十郎包永が铸造した（『福

陵新報』明治二十八年七月十日三面）。

注33 大正十一年（一九二二）四月三日から西公園光雲神社で開催された長

政公三百年祭に、福博の町世話人一同から上名島町の山鹿銅器铸造所に

おいて製作された青銅製水槽が奉納された（『福岡日日新聞』大正十一

年四月四日七面）。この記事では鋳物師でなく鋳造所の名称が用いられ

ている。

注34 『九州日報』明治三十一年八月十二日三面。

図版

① 網敷天満宮（福岡市博多区綱場町）。

② 「銅華表奉納詳細記抜書」（表紙）、称名寺所蔵（古文書692）、紙本墨

書 縦一冊三五紙、二七・五×二〇・六cm、一八七三年。

③ 同六八〜六九頁。

④ 「網敷天満宮御肖像」（部分）、称名寺所蔵（絵画86）、絹本墨画掛幅装一

幅、一〇一・〇×三三・一cm、一九〇二年。

⑤ 鳥居の名称、根岸栄隆『鳥居の研究』厚生閣 一九四三年 より転載。

⑥ 太宰府天満宮銅鳥居の絵葉書、公益財団法人古都太宰府保存協会所蔵、

一九〇七〜一九一八年発行。

⑦ 地理研究会著作『最新実測 福岡市外全図』（部分）博多高田弘陽堂 一

九〇九年 より転載。

⑧ 「干潟龍祥先生之像」胸像、像高四八・五cm、一九七七年、筑紫女学園

大学構内。

史料

『銅花表奉納詳細記抜書』（称名寺古文書692）

表紙題箋 貼紙墨書「銅花表奉納詳細記抜書」

紙本墨書、縦綴り、一冊三五紙（全六八頁）、表紙法量 縦二七・五cm 横

二〇・六cm、

（一頁）抑冷泉津網敷／天満神へ銅花表献納之儀其権輿は連年の／志願に候

へ共容易からぬ業件有之深く志を／齎らしいまた時期の到らざる処と相忍ひ

且時／形にも拘泥し星霜を経る事久しく今茲明／治二己巳年忽然発志傍友中

西惣右衛門へ諸端を／精話す同人頗る至感加之最も同氣し巡周／して無話等

も致すべく旨諾束に及び夫より

（二頁）して各子へ加財開儀にいたる各子併願を得／二日を不過して記載名

簿整ふ則鋳師に／委ね献備成就す益財業も進歩して／神明の加護を鑄るもの

也其概略を銘する事／かくのこし／発起 安川源右衛門

（三頁）一網敷／天満宮へ兼て心願有之候二付銅鳥居奉／納仕度候得共何様

大造之事故難／及自力候二付中西惣右衛門殿同道にて所々へ／寄付頼ニ参候

処何連も心能速ニ御寄／進帳へ御加リニ相成候間山鹿宜平殿へ銅／鳥居相願

積書為致候則左之通

(四頁) 積書之事／一金四百貳拾兩八／右之通二御座候 以上／巳十一月十五日 鑄師山鹿宜平／發起／安川源右衛門殿

(五頁) 十一月十七日十八日兩日中西惣右衛門殿同道にて寄進頼三參候 処金子百拾五兩壹步寄進／帳之ノ高御座候得共追々時節柄にて現／金八左之通寄付二相成候也／一金 百兩八 發起 安川源右衛門／一金五拾五兩八 仲間町 野村久治／一金五拾兩八 新川端町上 秋月屋卯平

(六頁) 一金五拾兩八 地ノ嶋 博多屋宗右衛門／一金三拾兩八 博多呉服町下 井筒屋甚兵衛／一金三拾兩八 仲間町 下澤善右衛門／一金三拾兩八 土居町上 磯野七平／一金貳拾兩八 仲間町 下澤善治郎／一金貳拾兩八 大坂安東寺町 和泉屋茂七／一金貳拾兩八 中嶋町 児嶋善三郎／一金貳拾兩八 浜口浜 大森嘉平

(七頁) 一金拾貳兩八 須惠皿山 澤田舜山組合／一金拾兩八 行ノ丁 園田小七／一金拾兩八 堅丁上 米屋藤助／一金拾兩八 浜小路町 鳥羽屋市助／一金拾兩八 官内町 米屋喜助／一金拾兩八 鱈町 古川嘉平／一金拾兩八 京都五條坂 近江屋小右衛門手代多七／一金拾兩八 横町 奈良屋權吉

(八頁) 一金拾兩八 出来町 肥後屋徳治／一金拾兩八 長州下関觀音崎油屋与三郎／一金拾兩八 福岡湊町 豊屋作平／一金拾兩八 博多西町下小堀甚七／一金八兩八 中嶋町 香具屋宗助／一金七兩貳步八 鏡丁 米屋喜平／一金六兩七合貳勺八 浜口浜 白土屋久平／一金五兩五合五勺八 中石堂町 奥村伊八

(九頁) 一金五兩八 古溪町 内田八右衛門／一金五兩八 浜小路町 清水屋嘉平／一金五兩八 浜小路町 油屋幸吉／一金五兩八 中石堂町 白垣儀助／一金五兩八 行ノ丁 伊藤千七／一金五兩八 土居町下 人形屋甚三／一金五兩八 川口町 武藏屋幸七／一金四兩八 土居町下 梅垣内丑藏女

(一〇頁) 一金壹兩八 博多秋月藏元之内 品川弥右衛門／一金壹步八 他方寄進ノ金 六百拾五兩貳勺八／一金百六拾七兩壹合ノ八勺八

(一一頁) 木綿屋孫次／櫛屋源治郎／袋屋又吉／姫路屋清兵衛／舁屋久平／櫛屋清次／龜屋卯平／福岡屋弥七

(一二頁) 山本屋源六／櫛屋茂平／長崎屋利八／小松屋利右衛門／多飛屋伊右衛門／綿屋治右衛門／袋屋半治郎／櫛屋金右衛門

(一三頁) 櫛屋儀助／菱屋嘉吉／墨屋卯助／紅屋太助／角屋卯吉／日田屋源右衛門内ノ右網場町寄付之處左之名元へ相頼候ノ網場町世話人

(一四頁) 櫛屋茂平／櫛屋金右衛門／櫛屋茂助／山本屋源六／一金百七兩八ノ新嶋与平

(一五頁) 吉井屋喜平／春田三郎／斧屋貞平／礮貝次平／礮貝茂平／裁物屋善吉／菱屋治助／米屋儀六

(一六頁) 扇屋三吉／白水藤七／裁物屋與吉／粉屋新平／大工 平治郎／菱屋正右衛門／粉屋久右衛門／裁物屋与右衛門

(一七頁) 欽形屋善平／右土居町寄付之處左之名元へ相頼候ノ土居町世話人ノ新嶋与平／白水藤七／新嶋善吉／一金百拾四兩三歩八

(一八頁) 仲薦屋清次／肥後屋次吉／紙屋平助／松居五平／肥後屋治平／米屋茂平ノ小間物屋利作ノ中西惣右衛門

(一九頁) 魚屋五三郎ノ右掛町寄付之處左之名元へ相頼候ノ掛町世話人ノ小間物屋利作ノ仲嶋屋清治ノ金千。三兩九合五勺八

(二〇頁) 右寄進金寄高也ノ一巳十一月十七日掛町寄進頼三付肥後屋次吉殿ノ方へ持參致候酒肴左之通ノ七拾四匁五歩八 酒肴代ノ一同日發起宅にて酒肴外ニ遣スノ拾八匁八

(二二頁) 一同十八日於梅垣氏ニ初寄合ニ付廻文出し何連ノも打寄ニ相成候則入目左之通ノ八百貳拾八匁八ノ一網場町寄付頼三付遣スノ百四拾九匁九歩八 酒肴代ノ一掛町名順并他方名順之晰合にて桐部金右衛門ノ殿方へ持參致

又／三拾八匁ハ 酒肴代

(二二頁) 一同廿一日石工藤右衛門殿甚助殿へ參候ニ付日雇方／善平殿呼ニ遣ス諸々見繕として荒々／打寄りて節入目／八拾貳匁ハ／一同廿七日名順之控致持參梅垣刑部殿同道／にて水野様へ御頼申上候其節持參致候／酒肴入目／四拾五匁ハ

(二三頁) 一存之外寄付頼も有之候ニ付相頼置候鳥居／今少シ大メ度候ニ付中西惣右衛門殿へ嘶合致／候処同人も至極可然様被申候ニ付同人／同道にて鑄師山鹿宜平殿方へ參り積書／仕直シ呉候様申置候処翌日宜平殿出浮／ニ相成金百両相増呉候様被申事ニ付／色々と申入候得共同人不承知之由にて候間／先其処にて至急御拵可有之旨尚申入／一十二月八日鳥居地形出来致シ就テは御社内(二四頁) 撰待引石橋又ハ玉垣之仕直シ等嘶合有之／候ニ付御連中へ廻文出シ候同日入目左之通／三百六拾貳匁ハ／一同十三日鳥居鑄入有之候ニ付又々廻文いたす／山鹿宜平殿方へ為持遣ス酒肴／百四拾四匁八歩ハ／一鳥居建立銘書彼是ニ付願書左之通相／認申候事

(二五頁) 博多網場町日田屋源右衛門乍恐／奉願上候口上之覚／私議／綱敷天満宮へ心願有之候処／時節柄何様難及自力折柄信心之向／有之追々志御座候間銅鳥居寄進仕／度奉存候条何卒願之通御許容被／仰付被為下候様奉願候勿論質素／ニ執斗可申候条何分共宜敷御聞／通被仰付被為下候様此段偏ニ奉願(二六頁) 上候已上／明治二年巳十二月廿四日／博多網場町／年行司格／日田屋源右衛門／御奉行様／右ハ十二月廿四日ニ願書差出申候且又梅垣氏／も同日左之通願ニ相成候

(二七頁) 口上之覚／一網場町日田屋源右衛門義年来心願ニ仍て／当社へ銅鳥居寄進仕度段申入候尤社／地内ニ建立仕候此段御聞濟被下度偏ニ／宜敷御執成奉願候已上／巳十二月廿四日 梅垣 族／社寺御役所(二八頁) 一同廿七日右願御聞濟被仰付候段年／行司右願書へ御役所割判

相濟一／同ニ掛合參候此時年行司土居町上深見甚三郎殿／願之通今日御聞濟ニ相成候条其御心得／可有之候／十二月廿七日 深見甚三郎／日田屋源右衛門殿

(二九頁) 一梅垣氏之願御聞濟ニ相成候／其御宮へ網場町日田屋源右衛門と申者今／銅鳥居奉納之儀願之通承届候事／巳十二月廿七日 祭祀局／土居町下／梅垣刑部殿

(三〇頁) 右事は御聞濟ニ相成候間寄付連中へ／廻文ヲ以為相知候／口上／銅鳥居奉納并前書之儀ハ御願申上置候／処昨日願之通御聞濟ニ相成候此段為御知申上候已上／鳥居前書／天下太平国家安全

(三一頁) 十二月廿八日 發起 日田屋源右衛門／各様／右願一条ニ付左之通遣物致ス／百八匁ハ

(三二頁) 一鳥居雛形之絵図出来致候ニ付大形屋棟平殿／へ作料相渡／九拾目ハ／一絵図板左之通遣ス／壹枚ハ 網場町年寄 柴田茂平殿／壹枚ハ 土居町年寄 新嶋与平殿／壹枚ハ 世話人 中西惣右衛門殿／右三人へ十二月廿九日ニ遣ス

(三三頁) 一右絵図板年号月日名元之儀ハ岩崎蕉陰様へ／相頼礼として左之通焼物にて遣物致ス／拾五匁ハ／一濱三嶺様へ前書頼ニ參候ニ付左之通持參致ス／九拾五匁ハ 煉酒 壹斤／鯛 壹枚／一午正月四日寄進札張出申候／三拾三匁ハ 寄進札

(三四頁) 一右一切并手間共左之通ニ候事／栢原石／四貫百五拾目ハ／石橋五間半渡式尺五寸葛石居方共一式／姪浜名／壹貫六百七拾目ハ／石橋長廿四間渡五尺／但老間ハ梅垣氏前二掛ル／八百五拾目ハ／玉垣台老間半ニ老間居方共一式

(三五頁) 金四兩貳歩卜拾七匁七分五厘ハ／右右玉垣御門葛石仕居方共一式／金四兩貳歩ハ／六貫六百八拾七匁七分五厘ハ／此金六拾六兩八合七匁

錢五文／合 金七拾壹兩三合七勺七五

(三六頁) 右石工渡／一午正月五日迄御門引二月廿五日迄／日雇方賃錢同雜作大工作料并諸入目／左之通／日雇方／鉢形屋善平殿 渡／金貳拾九兩貳合六勺五錢ハ

(三七頁) 大工／利平殿／甚右衛門殿／金拾七兩六合壹勺七錢ハ／右ハ撰待再興也／糝屋藤七殿 払／金拾八兩九勺六五ハ／右ハ材木代

(三八頁) 菱屋三郎殿 払／金三兩壹合六勺五錢ハ／右釘金物代／金壹兩三合ハ／右兩戸貳枚代／左官／正吉殿 払／金拾八兩四勺八錢ハ／御門撰待漆喰撰待之上／塗上一切賃錢

(三九頁) 金拾貳兩三合九勺八渡／右ハ白土芋づさふのり漆喰用鯨油迄／疊屋へ渡／金貳兩壹合ハ／疊三枚此分撰待二數／梅香殿／画料渡／金三步式朱ハ／但撰待戸貳枚

(四〇頁) 金拾三兩七勺式錢ハ／午正月分仕上酒并山鹿鑄入毎二／遣ス酒肴代一切／メ金百拾五兩九合式勺八錢五／一午正月十一日鳥居建所地付致シ候二付寄付連／中へ廻状差出候右地形搗二付入目左之通／七百七拾貳匁五分ハ(四二頁) 一正月十一日鑄入有之候二付廻状出ス皆々出浮ニ相成／候節御神酒入目／百八拾五匁ハ／一此頃英俊隊左右五番迄寺々へ屯集ニ／相成候二付御見舞として正月十九日左／壹番分五番隊迄加免煮寸志致候入目／左之通／金拾壹兩壹勺三錢ハ

(四二頁) 一同廿一日左隊二寸志致右隊二寸志不致候ては／不相濟義二候間又々加免煮右隊二寸志致候／入目左之通／金拾貳兩六合五勺壹錢ハ／右御札として隊長衆様分左之通被為下候事／一御酒 壹丁 但四斗樽／一鯛 三枚／メ／右之酒ハ行丁栢屋酒場ニ預置追々入用之節用ル

(四三頁) 一御見舞寸志致候段相達／大隊長様分左之通頂戴被仰付候事／一金八兩ハ 御酒錫料／但此分ハ鳥居棟上之節弘メ申候事／右御書付左之通／

当正月屯集之節隊中へ寸志指出厚／志之段奇特之至ニ候依て目錄之通

(四四頁) 指遣候事／午三月 横直躬／郡翼成／銅鳥居寄進連中／一正月廿四日鑄入二付廻状出シ荒々出浮ニ相成／候節酒肴左之通／貳百拾式匁ハ

(四五頁) 一掛町寄進金取立之寄合有之候二付掛町／世話人へ遣ス酒肴代／六拾三匁六分ハ／一正月七日御社内分蠟燭壹斤取ニまいり／吉竹屋喜平殿分目錄參候間左之通り 渡／三拾五匁ハ 吉竹屋喜平殿 払／一綱場町寄金割合にて寄付連中打寄／有之候二付世話人受持ニ相成候入目左之通

(四六頁) 金六兩ハ／一鳥居ノ石并手間共一切左之通／石工／増田藤右衛門殿／廣田甚助殿／栢原石／金四拾兩六合六勺七錢ハ／鳥居葛石式數石横式間半／幅壹間葛石仕居方共一式

(四七頁) 金拾五兩ハ／鳥居根づき石式ツ追増し／メ金五拾五兩六合／五勺七錢／相渡／一銅鳥居代左之通り相渡候也

(四八頁) 鑄師／山鹿宜平殿／金五百貳拾兩ハ／銅鳥居代／但／四月三日 金三百兩ハ 相渡

(四九頁) 五月三日 金百兩ハ 相渡／六月廿日 金百兩ハ 相渡／十一月十五日 金貳拾兩ハ 相渡／メ／右之通相渡候

(五〇頁) 一山鹿宜平殿被申ニは鳥居笠木之義ハ楠ヲ／以其上ヲ鑄物にて張不申ては出来不致候二付／早々相求吳候様との事二付則楠相求／代料左之通／五月三日／春日村／平四郎殿／金八兩ハ／楠平物三十／外ニ拾壹匁八分ハ 酒代増／右相渡り候

(五一頁) 一鳥居成就も頓て近まり候二付六月廿日餅／米相求白米ニ致し用意仕置右搗質／六拾八匁ハ／右白米ニ致用意仕置候処鳥居成就砌分／事故差發り棟上之儀も遠慮不致候／ては相濟不申世間之振ニ相成候二付右／白米困置候処鼠付其上米相場日々／下落ニ相成候間棟上之節ハ新ニ相求可／申卜存候間右白米売払則代銀左之通

(五二頁) 老貫三百七拾貳匁五分ハ／但此分無據次第有之委細ハ別／紙記錄ニ相記置候／一鳥居引廻り候節台之前後へ高張り四ツ／飾度又寄付連中へぶらり燈灯遣シ申／分一同ニ菱屋嘉吉殿へ相頼則賃錢左之通／三百六拾八匁ハ相渡／一五月十一日寄進連中へ左之通廻状差出候事

(五三頁) 口上／各様御寄進之銅鳥居成就仕候ニ付／来ル十四日朝五ツ時金屋丁山鹿宜平方へ受取ニ參可申候間同刻同方へ御出浮／可被下候此段廻状ヲ以御懸合申上候已上／尚々御子供衆方御召連被成候テ御出浮／可被成候／五月十一日／発起／日田屋源右衛門

(五四頁) 各様／右賃錢福次郎へ渡左之通／貳拾目ハ／一鳥居引廻り之節繪図為判摺寄進連／中へ老枚充配申候／一鳥居引廻り之節紅花手拭左之通遣申候
(五五頁) 寄進之向加勢人ニは黄手拭相渡候事／両町世話人并若衆中／掛町世話人／鑄師一手中／石工右同斷／きやり言ヒ 五人／他ニ諸々加勢人／一鳥居兩日引廻りニ付一切入目左之通

(五六頁) 金四拾兩八合七勺三錢五／一午六月廿三日笠木受取ニ參候処西門中小路之町丁寄進ニて加勢ニ相成同日鳥居之上ニ／上ケ申候其節入目／八百五拾四匁ハ／一銅鳥居御額之入目左之通り／金貳拾壹兩三合三勺老錢ハ
(五七頁) 一神具師渡左之通／大杉屋棟平殿渡／金五兩貳歩ハ／一棟上之節百味連中へ加勢頼ニ付き酒肴遣ス／五拾四匁ハ／一未九月廿一日棟上ニ付一切之入目左之通／梅垣氏／金拾壹兩五合九勺三錢ハ

(五八頁) 御備物包物米三俵酒肴共一切／山鹿宜平殿／金拾八兩壹合貳勺ハ／弓矢飾物包物米四俵酒肴共一式／佐藤卯助殿／金七兩貳勺ハ／米三俵包物酒肴代

(五九頁) 宇助殿／金五兩四勺五錢ハ／米貳俵包物酒肴代／石工／増田藤右衛門殿／廣田甚助殿／金八兩貳合四勺四錢ハ／米三俵包物酒肴一切

(六〇頁) 日雇方／善平殿／金四兩五合四勺七錢ハ／米三俵包物酒肴賃錢共

一切／金壹兩六合五勺ハ／兩丁年寄助役世話人へ遣ス幣台／金壹兩壹合七勺ハ／酒肴幣台／中西物右衛門

(六一頁) 金三合六勺七錢ハ／幣台肴代／発起／金七拾壹兩八合三勺七錢ハ／棟上之料理物其他一切／金百貳拾九兩五合貳勺五錢ハ／内

(六二頁) 金八兩ハ／棟上ニ付到来之分／大隊長様分／頂貳之分／金壹兩八合五勺ハ／米壹俵／下澤善治郎殿／金壹兩四合七勺ハ／野村久次殿／金九合ハ／米半俵／下澤善右衛門殿

(六三頁) 金七合七勺ハ／網場町／無寄付ノ向／金壹合五勺ハ／八百屋惣右衛門殿／金壹兩八合五勺ハ／米壹俵／井筒屋甚兵衛殿／金三合ハ／米屋藤助殿／金壹合ハ／米屋儀六殿

(六四頁) 金壹合ハ／青木氏／金貳合ハ／橋口 梅垣氏／奴留由氏／金三合ハ／畳屋作平殿／金壹合五勺ハ／大山次平殿／金壹合五勺ハ／田中傳治殿
(六五頁) 金三合ハ／奈良屋権吉殿／金八兩五合九勺ハ／合 金拾六兩五合九勺ハ／殘 金百拾貳兩九合三勺五錢ハ

(六六頁) 右棟上入目也／惣入目合／金千四拾壹兩七合六勺／五錢ハ／内金千三兩九合五勺ハ／寄進金寄高

(六七頁) 指引殘／金三拾七兩八合壹勺／五錢ハ／右惣算用金不足／右此分發起分出ス

(六八頁) 右銅鳥居初發分棟上ケ迄之記録相認ノ私手元へ所持仕候併シ格別之大金御寄／進ニ相成候条右拔書老冊差出申上候也／明治六年癸酉五月／発起／安川源右衛門／土居町年寄／新嶋與平殿／外ニ左之御面々へも配進仕候事
(六九頁) 野村久治 守部卯平／山崎宗右衛門 樋口甚兵衛／下澤善右衛門 磯野七平／村上清治／網場町年寄 柴田茂平／世話人 中西物右衛門

(たなへ) たかお…人間文化研究所 客員研究員



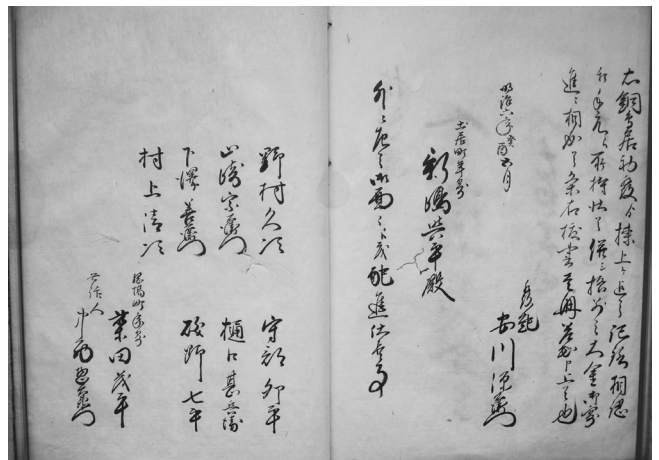
②銅華表奉納詳細記抜書



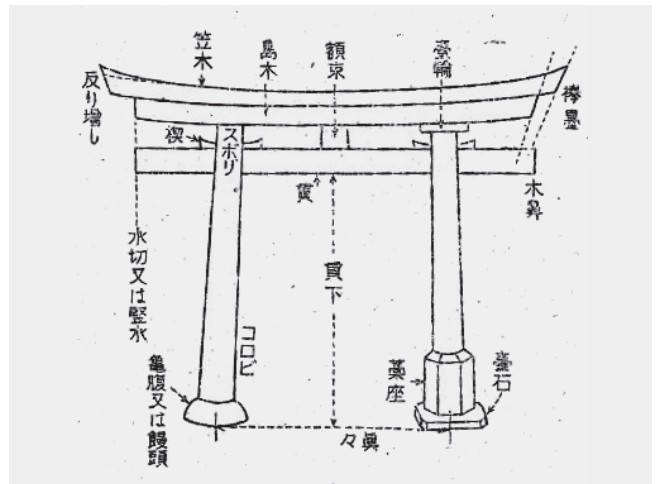
①博多 網敷天満宮



④網敷天満宮御肖像



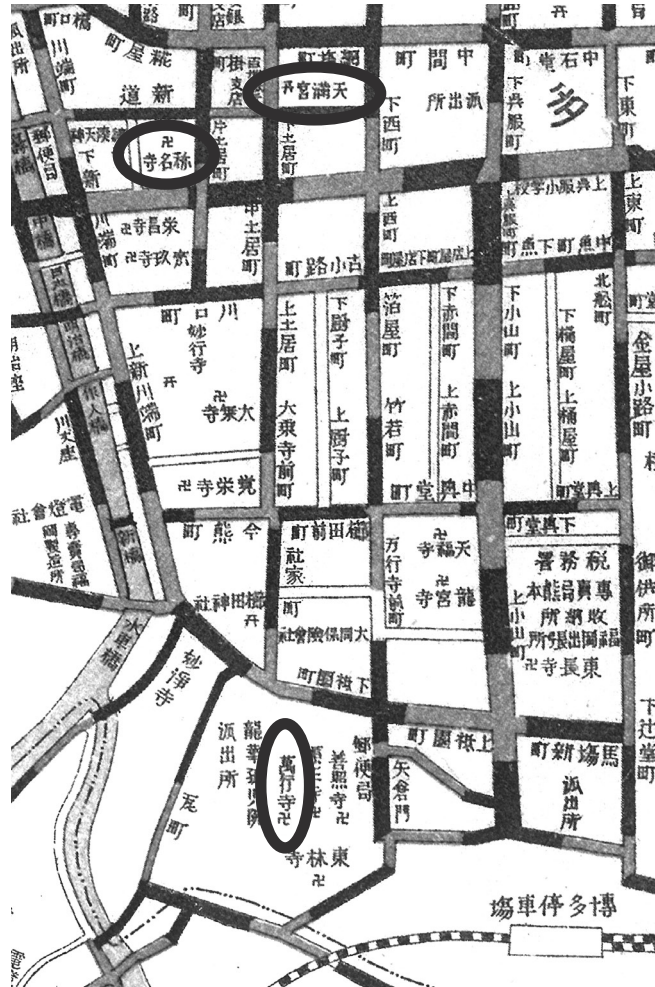
③銅華表奉納詳細記抜書（巻末68～69頁）



⑤鳥居の名称（『鳥居の研究』より）



⑥太宰府天満宮銅鳥居（絵葉書）



⑦福岡市外全図（部分、博多部）



⑧干潟龍祥先生之像

